

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

受 理 番 号	学 校	教 科	種 目	学 年
26-128	高等学校	家庭	家庭総合	
発 行 者 の 番 号 ・ 略 称	教 科 書 の 記 号 ・ 番 号	教 科 書 名		
7 実教	家総309	新家庭総合 パートナースhipでつくる未来		

1. 編修の趣旨及び留意点

- ・人は、生涯を通じてさまざまな人や社会とかかわっていく。その中で一人の生活者として自立して生きていくことが重要となる。本書は、人とかかわり、社会とかかわり、自立を基本におき、編修した。
- ・人や社会との関係を考えること、生活をするうえでの衣食住の技術、消費者としての知識など、一人の生活者として必要な知識・技術を身につけられるような教材を選択し、学習が進められるようにした。また学習した内容を実際の生活に結びつけられるような身近な題材もとりあげた。
- ・各節の冒頭に、学習の動機付けとなるようなワークを設け、次に学ぶ学習内容に生徒が興味・関心が持てるようにした。また、実践的な教材で「実際に行う」ことにより、生活を客観的・科学的に見る目を育てられるようにした。
- ・生活に必要な知識や技術を学習していく中で、生活の課題をみつけ、よりよい生活をめざしてどのような改善をしたらよいかを考え、改善にむけて実践していく力をつけられるようにした。

2. 編修の基本方針

教育基本法第二条の各号の目標を達成するため、それぞれ以下の点を基本方針とし、本書を編修した。

<p>第1号 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自立した食生活・衣生活・住生活を営み、家族や社会の一員として生きていく上での基本的な知識を身につけるとともに、現在や将来の課題解決に向けてとりくめるような実践的学習を豊富に盛り込み、話し合いや調査などによって幅広い知識を養うことができるようにした。 ・ActivityやCheck Up、実践活動、ホームプロジェクトなどの、実際に考え、行動する学習を通して、真理を求める態度を養えるようにした。 ・家族や子ども、高齢者とふれあうこと、また、環境や消費生活などについての知識と課題などを学ぶことによって、豊かな情操と道徳心を培えるようにした。
<p>第2号 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各節の導入のワークにより、自主的に学習に向かう態度を培い、そこから知識を得、自主的・自律的に生活における課題を解決しようとする精神を養えるようにした。 ・今の自分を見つめ、適性などについて考えることによって、将来の職業について考え、合わせて生活に必要な労働の意義について学び、働くことの重要性が理解できるようにした。

<p>第3号 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立は、人と人とのかかわりの中で培われること、また、家族、子どもや高齢者、社会とのかかわりを学ぶことにより、男女の平等や公共の精神を養うことができるようにした。 ・ 調理実習や実践的な学習などについては、グループで取り組むことを念頭に置き、他者と協力する態度を養えるようにした。 ・ 一つのテーマについて話し合う機会を設け、他者の考えを理解しようとする態度を養えるようにした。 ・ 生活に関する法律や制度などを盛り込み、それらの成り立ちや内容を理解することによって、社会の発展に寄与できるようにした。
<p>第4号 生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族、子ども、高齢者など、身近な人たちとのかかわりを通して、また、人間の発達や老いを学ぶことによって、生命を尊ぶ態度を養うことができる内容とした。 ・ 私たちが営む生活と環境とのかかわりについて学び、生命尊重、環境保全の行動に自ら積極的に参画する態度を養えるようにした。
<p>第5号 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私たちの生活に息づいている食生活、衣生活、住生活などが先人から受け継がれてきたことに気づき、それらの知識が現在の生活を豊かにできるものであると理解することにより、自分たちの住む国や地域の文化を大切に思う気持ちを養い、国や郷土を愛する態度が身につくようにした。 ・ 日本をはじめ世界の社会の制度や、衣食住に関する他国の文化や他国とのかかわり、家族や子ども、高齢者、障がい者、また環境に関する世界の動きについて随所に取り上げ、世界的な視点で学習できるようにした。

3. 対照表

● 全体的な特色

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
各節の導入のワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の動機付けとなるような投げかけをすることによって、学習への興味・関心を持たせ、主体的に学習に参加する意欲を養うことができるようにした。(第2号)。 	p. 6、p. 8、p. 30、p. 32、p. 60、p. 62など
ActivityやCheck Up	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学んだ基礎的な知識から幅広い知識や教養へと発展させることができるように、実践的な学習を随所に盛り込んだ。(第1号)。 	p. 6、p. 7、p. 12、p. 13、p. 31、p. 37、p. 44、p. 45など
実践してみよう ホームプロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活の課題の解決のために、自ら取り組めるように、「実践してみよう」「ホームプロジェクト」などの課題解決例を適宜配置し、主体的な学習ができるように工夫した(第2号)。 	p. 80～81、p. 233～234、p. 240～241

World Note	<ul style="list-style-type: none"> 各章末に設けた World Note を学習することにより、世界に目を向けさせ、自分の生活が世界とどうかかわっているのかを知り、知識を深めることにより、国際的な視点に立って物事を考える力を養えるようにした。(第3号) 	p. 26～27、p. 56～57、p. 78～79、p. 138～139、p. 176～177、p. 200～201、p. 230～231
本文中のゴシック体	<ul style="list-style-type: none"> 学習上で重要な用語についてはゴシック体として強調し、併せて丁寧な定義や説明を記述することで、幅広い知識と教養の定着に資するようにした(第1号)。 	p. 6、p. 7、p. 9、10、11など

● 各章における特色

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
1編 第1章 自分らしい生き方と家族	<ul style="list-style-type: none"> 自立して生きることとは、男女の関係、家族との関係、社会との関係の中で成し遂げられ、自分だけでなく他者に対しても大切に思う気持ちを学習できるようにした(第1号、第3号、第4号)。 生きていく上で、家事労働や職業労働は重要であることをのべ、それらの意義を考えることによって、勤労を重んずる態度を養えるようにした(第2号)。 男女が共に生活を築いていくという視点を盛り込んだ(第3号)。 他国の家族などの制度を学ぶことにより、他国への理解を深められるようにした(第5号)。 	p. 6～11 p. 20～23、 p. 13、p. 22、p. 26～27 p. 26～27
1編 第2章 子どもとかかわる	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの発達・発育の基礎的な知識を学ぶことにより、生命を大切にすることを養うことができるようにした(第4号)。 子どもとかかわるという学習を通して、子どもを理解しようとし、子どもに対してどのような配慮ができるのかを考えることができるような教材とした(第1号、第3号)。 他国の育児の状況などを学び、国際的な視点に立つことができるようにした(第5号)。 	p. 32～45、p. 50～51 p. 31～32 p. 53、p. 55、p. 56～57
第1編 第3章 高齢者とかかわる	<ul style="list-style-type: none"> 高齢社会の現状を知ることによって、これからの社会に向けての取り組みについて考えられるようにした(第1号)。 高齢者とかかわり、高齢者の心身の状況や生活を理解することにより、生命の尊さを学ぶことができるようにした(第4号)。 	p. 60～61 p. 62～69
第1編 第4章 社会とかかわる	<ul style="list-style-type: none"> 日本における社会保障制度などを学び、互助の理解を深め、ボランティア活動への参加などを通して、他者への理解を深めるとともに、公共の精神を養えるようにした(第3号)。 	p. 72～73、p. 76～77

	<ul style="list-style-type: none"> ・日本で生きるさまざまな人に対する理解を深めることによって、他人を思いやる気持ちなどを培っていくことができるようにした（第1号、第4号）。 	p. 74～75、 p. 78～79
第2編 第1章 食生活をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・先人から受け継がれた食の文化を学び、郷土や国の歴史や文化を知ることにより、また、他国における食の習慣や歴史的・文化的背景を知ることにより、国や郷土への関心や思いを深め、また他国の文化を尊重する態度を養えるようにした（第5号）。 ・食生活を営むにあたって、栄養・調理の基本的な知識を得、実生活においてその知識を実践に生かせるようにした（第1号）。 ・自分たちが日々営む食生活と環境とのかかわりについて考えることによって、世界とのかかわりや、それを生産する人たちや自然に対する理解を深められるようにした（第4号）。 ・調理実習などを通して、グループで学習することによって、他者と協力する精神を養えるようにした（第3号）。 	<p>p. 82～87、 p. 126～127</p> <p>p. 92～p. 133</p> <p>p. 134～139</p> <p>p. 118～133</p>
2編 第2章 衣生活をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・人類が衣服を着用するにいたった歴史や気候・風土との関係など、衣生活が発展してきた過程を知ることにより、日本や世界の衣生活の文化を大切にすることを養えるようにした（第5号）。 ・繊維の知識、衣生活における管理の知識を習得することにより、自らの衣生活をよりよいものにしようとする力を養えるようにした（第1号）。 ・自分たちの衣服がどこでどのように生産されているのか、また環境とどのようにかかわっているのかについて学び、他国を尊重する態度、環境の保全に取り組む態度を養えるようにした（第4号、第5号）。 ・衣服製作実習においては、自主的に取り組みが行えるように工程を記載し、また創造的に製作に取り組めるような教材も盛り込んだ（第2号）。 	<p>p. 140～143</p> <p>p. 146～157</p> <p>p. 176～177</p> <p>p. 164～175、カラーページ④～⑥</p>
2編 第3章 住生活をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の住生活の変遷や、気候・風土との関係を学ぶことによって、日本ではぐくまれてきた文化を尊重する心を養えるようにした。また、他国の住生活も合わせて考えられるようにした（第5号）。 ・住空間の成り立ちや、平面図を読み取るなどの学習を通し、自主的によりよい住生活について考え、創造できるようにした（第2号）。 	<p>p. 178～183</p> <p>p. 184～187</p>

<p>3編 第1章 消費行動を考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者としての意思決定や契約の基礎的知識を学習することにより、自立した消費者として生活していく力を付けられるようにした（第2号）。 ・現在の生活、消費行動と環境とのかかわりについて学ぶことにより、環境への関心を持つとともに、環境の保全や自然との共生について考えられるようにした（第4号）。 	<p>p. 204～211</p> <p>p. 202～203、 p. 216～221</p>
<p>3編 第2章 経済的に自立する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活を営む上での家計の管理や経済計画の重要性を学び、将来の経済設計にむけて自律的・創造的に生活設計に取り組むことができるようにした（第2号）。 ・家計が日本の経済、世界の経済とかかわっていることを学び、社会の一員としての自覚と責任を持つことができるようにした（第3号）。 	<p>p. 222～229</p> <p>p. 222～223</p>
<p>生活設計</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・上記のことがらを学び、人とのかかわり、環境や自然とのかかわりの中で、社会に生きる一員として自立し、責任を持ち、生活を営めるような内容とし、まとめとした（第1号、第2号、第4号）。 	<p>p. 234～237</p>

4. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

学校教育法第五十一条の各目標を達成するため、以下の点に留意し、本書を編修した。

<p>一 義務教育として行われる普通教育の成果をさらに発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家族関係、食・衣・住などにかかわる基本的な内容については、中学校での学習内容も掲載して確実な定着を図り、実践的な学習につなげられるようにした。
<p>二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を客観的に見つめ、将来の職業や生活を考えることによって、「社会の中の自分」を自覚できるような教材を盛り込んだ。 ・現在の生活における課題を見つけることにより、より専門的な知識や技術に取り組む姿勢を身につけられるようにした。
<p>三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・法律や国の制度、また、他国の制度などを学び、それらの知識を深めるとともに、それらを通して、今の生活の課題解決に向けて考え、行動できる力を養えるようにした。

編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表、配当授業時数表)

受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
26-128	高等学校	家庭	家庭総合	
発行者の 番号・略称	教科書の 記号・番号	教 科 書 名		
7 実教	家総309	新家庭総合 パートナーシップでつくる未来		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

●全体的な配慮と特色

(1) 本書は大きく3編からなる構成とした。第1編は自分を見つめること、人とかかわって生きること、社会の一員として生きること、の内容を盛り込み、第2編に食生活・衣生活・住生活の基本的な知識・技術を学べる内容とした。第3編「消費者として自立する」においては、まず、生徒に消費者としての自覚を促すために、第1章として「消費行動を考える」をおき、消費者・生活者の視点から環境分野につなげ、第2章として「経済的に自立する」を配置し、経済のしくみやこれからの経済的自立にむけて考えられるようにした。

(2) 環境に関する具体的な内容は、食生活・衣生活・住生活の中で取り組めるよう、第2編の食・衣・住のそれぞれの分野で記述した。環境全般の記述については、消費行動との関連をはかるため、第3編の1章に配置した。

(3) 学習の段階で、考えたり、検証したりすることができるよう随所に「Check Up」を設けた。

(4) 実践的・体験的な学習として随所に「Activity」を設けた。生徒が実際に行動することによって学習を深め、知識や技術の定着がはかれるようにした。

(5) COLUMNを随所に挿入し、本文を具体化する内容や、事例などをとりあげ、理解を深められるようにした。

(6) 章末は、「World Note」として、世界の状況や日本と世界とのつながりを考えられるようにし、世界という広い視点をもって、各分野の学習を深められるようにした。

(7) 巻末カラーページでは、生徒の学習経験に応じて学ぶことができるよう一部中学校の既習事項である内容を掲載した。

(8) 1編と3編の最後に、「実践してみよう」として、生活の課題解決の例をとりあげ、自律的に学習できるようにした。

●具体的な配慮と特色

第1編 人とかかわって生きる

○第1章 自分らしい生き方と家族

(1) 各ライフステージの課題を生徒が自分のこととしてとらえられるように、「自分を見つめる」を本書の冒頭でとりあげ、生涯発達の学習が網羅的にならないようにした。また、自分自身を見つめるとともに、青年期における他者との関係や男女共同参画社会の動きなどにも目を向けられるような内容とした。

(2) 生徒がこれから家族・家庭をつくっていくという視点から、パートナーとの出会い、子ども時代から高齢期までの人の一生における家族関係についての学習が深められるようにした。客観的な資料や社会の現象をとりあげ、現在の家族・家庭の変化、家族の抱える問題などを学習できるようにし、これからの家族のあり方について考えられるようにした。

(3) 家族に関する法律については、結婚・離婚・扶養・相続の基本的な内容を取り上げた。

(4) 生活を支える仕事については、現在の労働をとりまく状況を知り、就業について考えられるようにした。また家庭での仕事や地域での仕事については、職業と同様に生活に欠かせない労働であることを記述した。生活時間については、労働時間と密接な関係があることから、労働の次に配置した。

○第2章 子どもとかかわる

(1) 本章では、生徒が子どもと交流することで、子どもについての理解をより深め、生徒自身も育てられるという観点から、子どもに積極的な関心を抱くことができるよう、節の導入やActivityなどで配慮した。

(2) 子どもの発達に関する節においては、心身両面の発達段階に応じた保育の知識と技術が系統立てて学び取れるように配慮した。また、子どもの生活に関する内容では、生活習慣、遊び、食生活と衣生活、健康などについての基本的な内容を記述し、実践的な教材を取り上げることによって、その内容の定着をはかれるようにした。

(3) 子どもの人間形成にとって、親や家庭、社会の環境がいかに重要であるかを考えられるものとした。

(4) 生命に対する責任を持ち、子どもを育てていくという観点から、青年期における健康管理、育児性、妊娠などについての記述を設けた。その中で生命を尊ぶ気持ちを身につけられるようにした。

(5) 子どもが育てられていく中で、親が保育者としての責任を果たすために、どのような法律や社会的支援があるのかを学び、社会全体で子どもを育てていくという視点を持てるようにした。

○第3章 高齢者とかかわる

(1) 自分にとっての高齢期は遠い将来であると思う高校生が、高齢者とかかわることで得られるものを引き出せるような実践的な活動を取りあげた。また、客観的に高齢社会をとらえ、客観的に高齢者の生活を理解できるような資料を掲載し、高齢社会の現状や高齢者の現状について理解が深められるようにした。

(2) 高齢者の介助・介護の基礎においては、高齢者が主体的に生活して生きるためという視点から、どのような介護や介助ができるかを考えられるようにした。特に高齢者とのコミュニケーションの重要性、高齢者と生活を共有することの重要性を理解できるようにした。高齢者の日常生活の介助の実習においては、生徒同士で行えるように、食事・移動の基礎的なものを取り上げた。

(3) 高齢者の介護サービスについては、介護保険制度を取り上げ、地域社会における高齢者サービスのしくみの基礎について学べる内容とした

○第4章 社会とかかわる

(1) 社会福祉については、自分とは無関係であるにとらえられがちである内容であるため、生徒が自分自身にかかわることがらであることが理解できるような記述を工夫した。

(2) ボランティア活動については、地域社会に生きる一構成員であることを自覚できるような記述とした。

第2編 生活をつくる

○第1章 食生活をつくる

(1) 食文化が自然環境・社会環境とのかかわりの中で形成され、それぞれの地域特有の食文化を形作ってきたことを理解させるようにした。世界の食文化、日本の食文化、郷土の食文化を学ぶことにより、現在の食を考える動機付けとなるようにした。

(2) 生徒が自身の食生活の課題、現代の食生活の課題を見つけ、よりよい食生活をつくるために、栄養・食品の知識、食品の衛生的な取扱い、そして調理の技術を身につけられるようにした。

(3) 栄養・食品、衛生、献立作成などの学習を経た後、それぞれの知識を総合的に生かしながら、調理を行うことができるよう実習例を示し、相互に関連づけられるようにした。

(4) 調理実習について

①実習1～3までは、主として日常食を取り上げ、基本的な調理技術の習得を目的とした。各題材ごとに、エネルギー、たんぱく質、脂質、塩分について表示し、献立の立て方、食事摂取基準との関連をはかれるようにした。

②食文化に対する興味・関心を喚起する題材として、実習4では日本のおせち料理、実習5ではさまざまな米料理を取り上げた。

③実習6では、主食・主菜・副菜・汁物・デザートを取り上げ、実習題材を組み合わせで献立を作成できるようにした。

④実習7では、同じ素材を用いてさまざまな調理法を学ぶ題材とした。

(5) 食生活のまとめとして、これからの食生活を広い視野で考えられるよう、日本の食料事情や自分自身の食生活と環境とのかかわりを記述した。

○第2章 衣生活をつくる

(1) 衣服の起源にふれることにより、「人間にとって衣服とは何か」を考えることで、衣生活分野に興味・関心が持てるようにした。

(2) 衣服の機能や衣服の素材、衣服の管理の知識を学ぶことにより、実際の衣生活に結び付けられるようにした。また、快適な衣生活を送るために、衣服に関連する事故やユニバーサル・デザインにもふれた。

(3) 平面構成(和服)、立体構成(洋服)の特徴を理解させ、実習において平面構成のじんべい、立体構成のハーフパンツを取り上げた。また衣服のデザインの要素として、形・素材・色などについて取り上げた。エプロンを取り上げて、手芸などで創意工夫ができるようにした。

(4) 巻末カラーページにおいて、ししゅう、ミシンの取扱いを説明し、生徒の学習経験に応じた利用ができるようにした。

○第3章 住生活をつくる

(1) 住まいの機能では、人と住まいのかかわり、住まいと風土のかかわり、家族と住まいのかかわりについて知ることにより、住居が人間の生活行為の器として必要な諸条件を持つことを理解できるようにした。また、日本の住まいがどのように変化してきたのかを生活様式とかかわらせて学習できるようにした。

(2) 住まいの計画では、生活と平面構成とかかわり、家族構成などのかかわりを学習し、住居の主体的な選択ができるようにした。また、実際の間取りや生活が読み取れるような図を用いた。

(3) 室内の環境については、室内環境の条件、メンテナンス、住宅の安全についての知識を習得し、快適な室内環境をつくることのできるようにした。

(4) 現在の住生活の現状や、住環境と地域社会、自然環境や社会環境との調和などについて学ぶことにより、これからの住まいや住環境のあり方についての方向性を考えられるようにした。

第3編 消費者として自立する

○1章 消費行動を考える

(1) 1章の冒頭において、暮らしの多くの部分を消費行動が占めていることを理解できるようにし、消費行動を考える導入として、意思決定の流れを具体的に説明した。

(2) 経済の進展やグローバル化などによる流通の変化や、販売方法・支払い方法の多様化・複雑化などに対応できる知識を習得できるように、具体的な資料を取り上げて学習できるようにした。

(3) 消費生活の現状や課題、消費者問題などにふれ、生活者として主体的に問題を解決していくことができるような内容とした。

(4) 消費者問題の後に、自らの消費行動を見直す観点から環境問題を取り扱った。持続可能な社会をつかっていくためには、消費者として、生活者としてどのような課題があるのか、また、主体的にどのように解決したらよいかを学習できるようにした。

○第2章 経済的に自立する

(1) 家計と経済社会のしくみについて理解できるような記述とし、最近の家計の特徴についても取り扱った。

(2) 生徒が将来の経済計画の必要性を具体的に捉えられるよう、実践的な教材を取り上げ、興味・関心を喚起できるよう配慮した。

○生活設計

「家庭総合」のまとめとして位置づけるため、学習してきた職業選択、経済設計、家族や身近な人との暮らし、生活時間、地域や世界との関係を取り上げ、将来の自分の生き方について考えられるようにした。

○実践してみよう ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動

これまで学んできた生活にかかわる事項から、課題を発見し、より豊かな生活をつくるため、「家庭総合」のまとめの学習としても取り扱えるように、ホームプロジェクトと学校家庭クラブを巻末に構成した。また、「実践してみよう」を1編、3編末におき、実践的な学習にとりくめるようにした。

2. 対照表

図書の構成・内容		学習指導要領の内容	配当時間数	箇所
第1編第1章 自分らしい生き方 と家族	1節 自分を見つめる	(1) ア (ウ)	1 4	p. 6～7
	2節 自立した生き方、共に生きる人生	(1) ア (ア)、(イ)		p. 8～11
	3節 共に生きる家族	(1) イ (ア)		p. 12～15
	4節 家族に関する法律	(1) イ (ア)		p. 16～19
	5節 私たちの生活を支える労働と生活時間	(1) イ (イ)		p. 20～27
第1編第2章 子どもとかかわる	1節 子どもを知る	(2) ア (ア)	1 6	p. 30～31
	2節 発達のすばらしさ	(2) ア (イ)		p. 32～39
	3節 子どもの生活	(2) ア (イ)		p. 40～45
	4節 親になることを考えよう	(2) ア (ウ)		p. 46～51
	5節 すこやかに育つ環境	(2) ア (ウ)、(エ)		p. 52～57
第1編第3章 高齢者とかかわる	1節 高齢社会に生きる私たちの暮らし	(2) イ (ア)、(エ)	1 0	p. 60～61
	2節 高齢者を知る	(2) イ (イ)		p. 62～65
	3節 高齢者の自立のために私たちができること	(2) イ (ウ)		p. 66～69
	4節 豊かな高齢期を迎えるしくみ	(2) イ (エ)		p. 70～71
第1編第4章 社会とかかわる	1節 支えあう暮らしとは	(2) ウ	5	p. 72～73
	2節 私たちの社会福祉	(2) ウ		p. 74～75、 p. 78～79
	3節 地域社会の一員としてのボランティア活動	(2) イ (エ)、ウ		p. 76～77
第2編第1章 食生活をつくる	1節 人と食物のかかわり	(4) ア (ウ)	2 4	p. 84～87
	2節 私たちの食生活	(4) ア (ア)		p. 88～91
	3節 栄養と食品のかかわり	(4) ア (イ)		p. 92～101
	4節 食品の選び方と安全	(4) ア (イ)		p. 102～105
	5節 食事の計画と調理	(4) ア (イ)		p. 106～133
	6節 これからの食生活を考える	(4) ア (エ)		p. 134～139
第2編第2章 衣生活をつくる	1節 人と衣服のかかわり	(4) イ (ア)	2 2	p. 142～143
	2節 衣服の機能	(4) イ (ア)		p. 144～145
	3節 衣服の素材を見てみよう	(4) イ (イ)		p. 146～151
	4節 衣生活の管理	(4) イ (イ)		p. 152～157
	5節 衣生活と資源・環境	(4) イ (エ)		p. 158～159、 p. 176～177
	6節 すべての人が快適な衣生活を	(4) イ (ア)		p. 160～161
	7節 衣服をつくろう	(4) イ (ウ)		p. 162～175
第2編第3章 住生活をつくる	1節 人と住まいのかかわり	(4) ウ (ア)、(イ)	1 2	p. 180～181
	2節 住まいと住まいの文化	(4) ウ (ウ)		p. 182～183、 p. 200～201
	3節 住まいを計画する	(4) ウ (イ)		p. 184～187
	4節 健康的な住まい環境	(4) ウ (イ)、(エ)		p. 188～191

	5節 安全な住まい環境	(4) ウ (エ)		p. 192～195
	6節 これからの住まいを考える	(4) ウ (エ)		p. 196～199
第3編第1章 消費行動を考 える	1節 消費行動と意思決定	(3) イ (ア)、(イ)	10	p. 204～205
	2節 社会の変化と消費生活	(3) イ(イ)、ア(ウ)		p. 206～211
	3節 消費者の権利と責任	(3) ウ (ア)、(イ)、(ウ)		p. 212～215
	4節 持続可能な社会環境	(4) エ(ア)、(イ)		p. 216～221、 p. 230～231
第3編第2章 経済的に自立する	1節 経済のしくみを知る	(3) ア(ア)、(イ)	6	p. 222～227
	2節 ライフステージと経済計画	(3) ア (イ)		p. 228～229
生活設計	生活設計	(5)	3	p. 234～237
ホームプロジェ クトと学校家庭 クラブ	実践活動 ホームプロジェクトと学校家 庭クラブ活動	(6)	2	p. 238～241

(備考) 配当時間数については、履修単位数を4単位として各章の授業時間数を示した。